(伊東協会長の解説)

長野県図書館協会会長の伊東直登と申します。長野県図書館協会のこと自体が、県立長野図書館協議会で議題になることはほとんどなかったと聞いているので、協会の説明をしつつ、現在の協会および県下の図書館の、お話を少しさせていただきたいと思います。

県の図書館大会ですが、それについてどのように検討をしていくべきか、非常に重要な問題として起きております。背景としては、コロナ禍が発生して、あらゆるものが影響を受けましたが、図書館大会につきましても、それまでは県下持ち回りで集まってやっていたが、持ち回りの地区に集合することができなくなった。集合できなくなったコロナ初年から、オンラインを併用し、現地の自治体がオンラインをコントロールしたり、それができずに委託をしたり、今年についてはオンラインなしの集合型でやる、ということで開催する市の状況に応じての開催を毎年強いられてきました。コロナのせいで、ここ4年程続いてきた現状です。

そもそも14という地域で持ち回っていますので、開催するときに、経験した人がまずない。初めてやるという人がほとんどで、試行錯誤を繰り返しながら、でも先輩方が築いてきたルールがありましたのでそれを尊重しつつ踏まえつつ、悪く言えば前例踏襲の部分もあったと思いますが、それがコロナでできなくなった。過去の積み上げが役に立たない。

コロナの1年目2年目3年目の形態全部が違いましたので、前年の反省を踏まえても、違う形にしたこともあるが、それもなかなかできない。オンライン開催を県下で開催するというのが、自治体によっては負担が非常に大きく、民間企業に委託するところもあったが、数十万円という予算がかかってしまう。お金の問題も含めて非常に課題があり、複雑になってきている。元々の問題を踏まえ、さらにそこにいろんな問題が加わってしまった現状です。

今年は須坂市で開催されますが、現地開催を早々決めていただきました。ただ、コロナ前の現地開催の形態については、以前の方法が伝わってなかったこともあり、コロナ前と同じ形ではない中でも、工夫して開催いただく形になりました。こうした情報の断絶も踏まえ、図書館大会はどうあるべきか考えていかないと、次はオンラインをどうするのか、予算はどうなるのかという心配をしています。

毎年その心配を繰り返しては、「やれ終わった」というホット感と課題も引継いで、でも次の年でも解決できずということを経験してきたことも問題です。大会そのものをどうしていくのかというところを考えなければいけないところになってきた。長野県図書館大会を少し私達自身が振り返らなければいけなかった。

改めて調べてみましたら私の調べた範囲では長野県だけが、学校図書館から県下のあらゆる図書館を網羅型に体制を作って図書館大会を開催している。他県では学校図書館大会とか公共図書館大会は実施しているが、全部網羅型というのは長野県だけらしい。私が聞いた話ですが、この形は長野県ならではです。それを昔に始まったことだからと言って切り捨てるのか。大事だと評価するのかという問題も含めて、話し合いしなければならないとなった。

過去を少し紐解いてみましたが、図書館法ができた1950年の翌年、長野県図書館協会が立ち上がりましてその年の秋に、第1回長野県図書館大会を開催しているのですが、長野県図書館協会を結成し設立したその時点で長野県図書館大会には、あらゆる図書館の館種が参加しているのです。

最近でこそ図書館はそれぞれの図書館連携、あるいはMLA連携とか、色々なところと地域連携とか言うようになったのですが、70年以上前にやっていた。そのときの長野県の前輩たちが図書館同士連携して一緒にやっていかなければ駄目だっていう信念のもとに、協会を立ち上げた。都道府県別でどこもそれが無いのだとすると、なんてすごいな。はっきり言えば70年前に時代の先をいっていた。

「先輩が築いたものだから大事にしなきゃ」ということでなく、今でこそ、あちこちとの連携がとても大事だよと言っている、まさにそのことを先陣切ってやってきた、長野県の形態を前向きに見直す時だと捉えたい。

長野県図書館大会は、次の佐久大会、その次の諏訪大会も迫っていますので、早く解決しなければと思っている。今話したような議論をしていると、図書館協会がどうあるべきかの話と表裏一体となった。図書館協会のあり方も併せて検討したい。長野県の図書館のあり方、それをどう考えるのかという大風呂敷であるが、そんな問題にまで発展してしまった。6月の総会で、検討チームを立ち上げることが決まったので、今準備を進めている。大きな団体なので、時間かけて何を話していこうかも含めて、検討していきたい。今そんな状態にいることを、共有していただけたらと思います。

協会のあり方と大会のあり方は、大会の方には県教育委員会も入っているので、メンバーがずれたので、別々に進めていくのか、あるいはどちらかが先行するのか、というところは論点になったが、議論が大会のこと協会のことに行ったり来たりするので、これは片側重視型の方もいるけれど、両方共有で共同テーマとしてやっていくのがいいかな、というところが今決まっている。どんなような話し合いを進めていくか、というところから第1回を始めようと思っており、詳しいことは何も決まっていますが、今日のテーマで言うと、その中に県立図書館はどう関わっていくべきなのかという視点で考えていただきたいな、と思っております。

スケジュール的に大会は今年6年度が須坂、須高地区で10月12日ですから、2週間後ぐらいに迫ってきています。来年度が佐久、佐久は別に学校図書館大会の、北信越地区大会が、今年、長野県に来るということで、佐久はその意味でも大変です。その次の年が諏訪で、その先も決まっていて、表になっている。

佐久大会は、チームの議論は間に合わないだろうと思っています。佐久の運営方法も見ながら、諏訪大会の検討が始まる頃にはチームの検討結果が生かせるよう、何か少しでも方向づけできたらいいなど、スケジュール感をもっているところです。

県立図書館に求められる新たな役割ということで、この県立図書館の方で出していたテーマですので、森館長さんの方から説明をお願いしたいと思います。

(館長の説明)

補足いたします。今回は図書館大会のことがきっかけとなって、協会そのもののことを考え直さなくてはならない。そのときに、協会において県立図書館の果たすべき役割というのが今まで通りでいいのかどうか。同時に見直しが必要になってくるだろうということで、今回このテーマ設定をさせていただいた。

他県では、長野県と同じ形で全ての館種が一つの協会を形作っているところはほとんどありません。今度の関東地区都県立図書館長会議の協議事項として、各都県の実態についてアンケート形式でご回答をいただいたところ、大体、学校は学校、公共は公共と、個別に協会を作られています。大学だけで協会を作っておられるところもあります。図書館大会は合同でやるところがいくつかありますが、組織も大会も一体としてやっているところは、少なくとも関東地区では長野県だけという状況です。

長野県図書館協会では、全体の事務局を会費によって事務局員さんがお一人おられ、それに加えて県立図書館が事務局機能を果しています。ただ、公共図書館部会は県立図書館が事務局となっていますが、小中学校部会については全くコミットしていません。学校は、校長先生たちが短いスパンで異動されていくので、小林さんがほとんど1人で繋いできたという状況がある。では、小中学校部会の事務局機能も県立図書館が担うべきではないかということになったときに、今のままでは体制として手が出せない状況があります。

文部科学省による「1人1台端末時代の学校図書館担当指導主事の仕事と知識」という指針が2021年に出されて、そこには都道府県の教育委員会の役割や、図書館支援センターを設置したり、県立図書館の中に指導主事を置くということが望ましいと書かれています。

また、最近、滋賀県で調査されたアンケート結果によると、県立都道府県立図書館に教員を配置している都道府県が27、配置人数69人になっています。半分以上の都道府県で県立図書館の中に指導主事の教員を配置し、学校連携がスムーズに進むように体制を作っている中で、長野県はまだそれができていない状況なので、ここは何とかしていきたい。

もう一つの課題として、「文化資源コーディネーター」というキーワードが出ています。長野県では、いわゆるMLA連携に加えて、学校や公民館、地域コミュニティ等とも連携して、地域資料を収集保存活用していこう、それを地域の学び、地域おこしにつなげようという動きがありますが、従来の図書館司書がやってきたことに、大きくプラスαの仕事が加わることとなります。体制を強化したり、人員を増やすことが現実的に困難な中、今までの仕事を整理して余力を作っていくにも限界があり、図書館職員の能力開発をしていく必要がある。社会教育士や学芸員、デジタルアーキビストなど、新たな資格の取得による育成も視野に入れたいところ。こうしたこともあり、一つ目の話題も設定させていただいた。一方で、市町村の側にもコーディネーター的な役割をしてくださる方が必要。春日委員や、平賀委員

は、まさにそうした役割をしておられると思いますが、それぞれの組織から一步、半歩出て手を結び合うという体制を作っていくことによって、今求められている新しい役割が果たしていけるのではないかと考えている。

こういう体制をしっかり作って足腰を強くしながら、図書館協会や図書館大会を事務局として回していけるのではないかと、県立図書館の立場として考えていることです。

(伊東協会長の説明)

資料の上段に書いてあります「公立図書館の設置および運営上の望ましい基準」の記載があります。新たな役割という部分で、今説明があったが、そもそも公立図書館の設置および運営上の望ましい基準というものがあって、かなり深掘りして図書館のあるべき方法や基準を書いてある。1は市町村立図書館について、2に都道府県立図書館が書かれている。その一番最初に「域内の図書館への支援」という内容で書かれている。

都道府県内の図書館の相互協力促進をしてください。とっているが、実際はこの図書館と言っているのは公共図書館のことを言っている。基準が作られてかなり経っているので、改訂されていくと期待はしているが、現実的には、はっきり書いていない。

次の資料は、図書館法の抜粋。実は図書館法の方が早くから進んでいて、図書館法第3条、図書館サービスは概ね次に掲げる事項の実施に努めなければならない、と記載されている4番目に、他の図書館や国立国会図書館や地方議会図書館、それから学校図書館等と、連携しなさいと書いてあり、9番目で学校や博物館公民館等と密接に連携協力しなさいと、これは図書館がまだできないでいる、非常に弱いところです。内にこもりがちな図書館の性格を反省しなければならないところだと思っています。けれど、図書館法は以前から連携やってくださいと言っている。先程の運営の基準は、図書館法に基づいて作れと言われて国が作っているが、そこでは連携について踏み込めていない。

図書館法で言うところのこの連携というのは今、まさに図書館の中で図書館の技術スキルとか色々言われる中で、そもそも図書館ができることには限界がある。国立国会図書館だけでなく、もっとあちらこちらと繋がらなければいけない。いろんな組織、団体、一言でくくれば地域ということだと思っているが、地域と連携し、地域の一員となる図書館運営をしていかなければいけないということが、この法律の読み下しとしてあっていいのではないか。図書館作りが地域作りということだと思っています。

最後に、図書館協会の会則の抜粋をここに入れさせていただきます。協会の目的ですが、これについては、今回は県内の公共図書館、学校図書館、大学図書館、その他がそれぞれ連携し合って、長野県の文化の向上に寄与することを目的とした、と記載されていますし、役員11条の中で会長、副会長は互選、推薦で挙がるのですが、理事長は県立長野図書館長をもって充てるとはっきり書かれているわけです。担当課長も理事になると記載されているので、この協会の要が県立図書館であるのはこの組み立てからいって明らかです。ならば、

図書館大会もそれに裏表にもなってきたてしまいますし、長野県の図書館大会でどうあるべきかという議論をするときに、県立図書館抜きで行われる議論ではないと思います。であるならば、県立図書館がもう少し何らかの力を持てる。県政に対しても物言える図書館、あるいは物を言わせてもらえる図書館にしていかなければいけないと思っております。